

生涯学習情報誌

Life Learning

5 2020
May.
NO.357



生涯学習開発財団

フランス人間国宝 シルヴァン・ル・グエン氏

Sylvain Le Guen

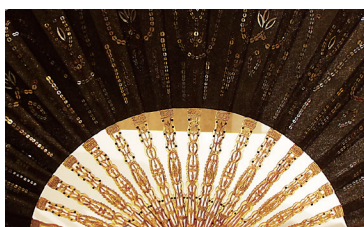
扇のルーツ日本で極めたい、フレンチと和のフュージョン

扇作家でフランス人間国宝でもある、シルヴァン・ル・グエン氏。当財団が後援した「有田とフランス人間国宝『ワザノワ会議』」(2018年11月開催・本誌2019年4月号にてレポート)に参加したご縁から、東京で開催された和装とのコラボ展示会場を訪ねた。

ル・グエン氏が扇の魅力に出会ったのは8歳のとき。開閉することで表情が変わる面白さや芸術性に魅了され、10歳で初めて自分で扇を作っていた。以来日本の工芸に惹かれ、ギメ東洋美術館に足を運び、国立東洋言語文化大学(INALCO)で日本語を学んだ。

「日本の伝統工芸作品は完成度が高く、見れば見るほど、かけた時間や技巧の奥深さが見えてきます。素材調達から造形・仕上げまでの職人の連携、さらには、自然に振る舞いながら計算され尽くしたかのようなお客様の所作や感性まで、日本ならではの『型』を感じます」

団扇状の扇は世界各地に昔からあったが、折り畳んで開閉できる扇子は日本で生まれた。それが中世のヨーロッパに伝わり、フランスでも淑女のファッションアイテムとして発展した。ル・グエン氏は、映画「マリ・アントワネット」(2006年)、「シンデレラ」(2015年)にも、世界観を表現するツールとして扇を提供している。そうした華麗な装飾や絵画が施されたフランス扇の伝統を継承しつつ、日本の折り紙からヒントを得た立体的装飾など、優雅で遊び心あふれる扇を発表し注目された。



アンティークの骨を修復し、扇面は新たにグエン氏が創作。どちらも精緻。

一体の材を薄く切り分け、中骨。木目のグラデーションが自然で美しい。



閉じて開いても波型の骨がなんとも個性的だ。

羊革と白い和紙を表裏から貼り合わせた。閉じたときの造形も面白い。

扇を開くと花が立体的にポップアップ。日本の折り紙からヒントを得た。

用いる素材は、扇面にはシルク、革、和紙、香水のテスト紙などを、装飾には金属、宝石、夜光貝、孔雀の羽、藁などを、骨には黒檀、プラタナス、竹、アルミニウムなどと、その多彩さも魅力の一つだ。そして、その精緻な制作工程を自分一人で担うのがル・グエン流。完成まで1年を要する作品もあるとか。

最年少の38歳でフランス人間国宝(メイトル・ダール)に認定された。日本の人間国宝を参考に1994年に制定され、技巧や芸術性の高さだけでなく、弟子を3年以上育成するなど伝統技術継承の取り組みも審査対象となる。

「フランスの扇はファッションとして発展しました。日本でも和装の大切な小道具ですが、他にも能扇など舞の扇、茶道の結界としての茶扇、武将が振った軍扇、お坊さんの中啓、さらに手紙や歌を書いたり、金品を乗せて渡したり、美的になったりと、昔から多様な役割を演じてきました。夏扇子で涼をとる様子も風流です。文化的視点からとても興味深いです。」

現在南フランスに工房があるが、今夏からは京都にも拠点を置き、より深く和の感性の中身をおいて制作を開始する予定だ。

「フレンチと和の融合は21世紀の理想的なフュージョンだと感じています。扇のルーツ日本で、日本人たちと一緒に作ることで新たな発見があることを期待しています。私からも新しい提案ができるよう、チャレンジしたいと思います」と意欲を語る。

鬼の学び^⑨

作家／出版プロデューサー／劇団主宰

鬼塚忠のアンテナエッセイ

政府の発出した緊急事態宣言のなか、この記事を書いている。

外出するのは一週間に一度の食料品の買い出し時だけだ。その時、杖をついた隣人の老婆と遭遇した。

「鬼塚さん、大変な世の中になりましたね。日本でも、これから死者がどんどん増えていくんじゃないですか。

緊急事態宣言中に学ぶこと

怖いね。私は歳だから、いずれにしても、もうすぐ死ぬのよ。私は、死んだ先に天国があると思っていただけ、実は天国って、今年の2月までのこの場所のことだったのね。いま気づきましたよ」とゆっくりとした口調で言われた。

コロナ騒動が深刻化するまでのこの場所こそが天国だった。

「まさしくその通りですね」と言うと、「死ぬまでに気づけてよかったわ」と微笑みながら、押しぐるまを押して去って行った。

人生も終わりに近づいた老婆の、まるで人生を悟ったような言葉は心に響いた。

では、幸福とはなんなのだろうか？ 考えてみた。

一般的に言うと、健康とお金だろう。健康については、私は医者でないのですがその議論は医者に譲るとして、ここではお金の話をしたい。コロナ禍は全世界規模での話なので国とか世界からの視点で語る。

ダニエル・ネトル著『幸福の意外な正体』という本がある。その解説の中で経済学者リチャード・イースタリンは、お金は人の健康にどのような影響を与えるのか、次のように語っている。

- ・一国の一時点での所得と幸福度には正比例の関係が見られる。
- ・国際比較で所得と幸福に関係があるにしても一国内の所得と幸福度ほど強くない。
- ・一国の時系列で見ると、国全体が豊かになっても幸福度は変わらない。

先の老婆の話はもちろん正論に値するが、一方でその幸福は今の日本の若者を踏み台している。

話は少しそれるが、なぜ、いま政府はキャッシュレス化を急がないのだろうか。数年前は懸命に推進していたではないか。コロナウイルスは、人との接触、飛沫、物に付着して媒介、またはエアロゾルで感染する。

そのものを經由して感染するというところだ。人と人とを媒介するもので最も多いのはおそらく現金だろう。紙幣にしろ、硬貨にしろ、ウイルスが付着している可能性は低くない。にもかかわらず、買い物をするとき、日本ではまだまだ現金での決済が多い。現金を媒介したコロナウイルスの感染が心配される。これが恐くて仕方がない。

中国でコロナウイルスが猛威を奮っていた今年の2月、中国の中央銀行は、紙幣を紫外線照射あるいは高温消毒して7〜14日間密閉保存してから再流通させたそうだ。さらに感染のひどかった武漢では40億元の新紙幣を緊急発行したという。ほとんど現金を使わない中国がそうだから、日本ではなおさら注意すべきではないだろうか。なぜ、ウイルスが付着する恐れのある現金を問題視

・所得がある一定水準に達すると幸福度との相関関係は見られなくなる。

つまり、国家が貧しいときは、収入が多ければ多いだけ幸福だ。国家間にできた貧富の差は個人の不幸にはさほど影響しない。国が豊かになったからと言って皆が同じだけ幸福感を得るわけでない。国が成長し、ある程度収入を得るようになると、幸福はお金にはさほど影響されないということだろう。

これを言い換えると、収入がある程度得られればある程度の幸福を得られる。しかし、それはある程度、国が裕福という前提での話ということだろう。

コロナ関連の報道番組をかじりつくように観ていて、この国の幸福の前提である、ある程度経済的に裕福であることが危うくなっているようで気がでない。

貨幣流通量が心配だ。コロナ禍の影響で現在、世界の大半の企業と個人は深刻な手持ちの現金不足に陥る。餓死や恐慌を防ぐために各国の政府は大量の現金を企業や個人にばら撒くだろう。その額は世界で軽く1000兆円を超えと言われている。そうしなければ餓死者や自殺者が出るので異論はない。だが、このときの世界市場への大量の現金が流れる。そのとき、もしかすると国境は今のようにはぼ閉ざされ、ほとんど人の移動のない社会かもしれない。

その中で、大量のお金が生産されたとき、果たして市場はデフレになるのか、インフレになるのか、はたまたスタグフレーションになるのか誰も予想できない。

それがもし、不況下での世界的スタグフレーションになれば、大量の餓死者が出るかもしれない。誰も世界経

しないのか。

2年ほど前、日本は官民一体となって、キャッシュレス化を推進していたが、あの勢いの良かったキャンペーンとかはどうなったのだろうか。今こそ推進すべきである。

まあ、こんなことを、部屋の中の閉じこもって考えているのだけれど、これ以上書くと、不安を助長することになってはいけないのでここで止めておきたい。これが、心配症である私の杞憂で終わればいいのだが、どうだろうか。

あと幸福について、付け加えたいことがある。

大津秀一著『死ぬ時に後悔すること25』という本がある。個人的にはこの本の中に個々人の幸福を考える鍵があると思う。この書籍は、「感情に振り回された一生を過ごしたこと」など、緩和医療医が、多くの死にゆく方々から、人生で後悔した話を聞き、まとめたものだが、逆に言うと、死ぬ時に後悔することをあらかじめ知り、それを先回りして、対処することができれば、もしかすると、死ぬ時に後悔しない人生、つまり幸福な人生を送れると思うのだからだろうか？



閉じ込められた自宅周辺→

●著者プロフィール

鬼塚忠（おにつか ただし）1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、2年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパでお金が底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年6月まで海外書籍の版權エージェント会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思い、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団もしも主宰でもある。著書『風の色』(講談社)2018年映画化。『花戦さ』(角川書店)2017年映画化。日本アカデミー賞優秀作品賞受賞。『Little DJ』(ポプラ社)2007年映画化。『カルテット!』(河出書房新社)2012年映画化。『海峡を渡るバイオリン』(河出書房新社)2004年フジテレビ45周年記念ドラマ化。文化庁芸術祭優秀賞受賞。『恋文讃歌』(河出書房新社)、『僕たちのプレイボール』(冬舎)2012年映画化など多数。



●『幸福の意外な正体』～なぜ私たちは「幸せ」を求めるのか』（きずな出版）

ダニエル・ネトル（著）
金森重樹（監修）
山岡万里子（翻訳）

進化論、脳科学、社会学、心理学、経済学など、あらゆる分野の「幸せに関する研究結果」を紐解きながら、幸福の正体と幸せを手にするヒントを明らかに。



●『死ぬときに後悔すること25』

（致知出版社）
大津秀一（著）

ほとんどの人は死を前にすると後悔をするという。終末期医療の専門家である著者が1000人を越す患者たちの吐露した「やり残したこと」を25に集約して紹介。儚くも、切ない思いが行間から滲み出てくる。

